

2026年4月29日

2025年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究 () ・個人研究 (○)	
研究代表者 (所属・職・氏名)	家政学部・専任講師・古川咲	
研究課題名	大正時代から昭和時代前期における「着物雛形本」の内容と役割	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	2025年4月1日 ～ 2026年3月31日	

研究実績の概要 (1)

江戸時代には「小袖雛形本」と呼ばれるファッションブックが刊行されていた。これには、多様な小袖の模様図が収録されており、当時の女性たちは、これを鑑賞して楽しむだけでなく、小袖を注文する際の見本としても活用していた。こうした雛形本の文化は明治時代以降も「着物雛形本」として引き継がれ、昭和時代前期まで続いた。

しかし、近代以降の着物雛形本に関する先行研究は、掲載された個々のデザインや模様(モチーフ)に注目したものがほとんどであり、雛形本そのものの分類や、それが果たした役割を捉えた研究は十分にされていない。特に、明治時代に続く、大正時代から昭和時代前期の雛形本に焦点を当てた研究はほとんど見られない。

筆者は、これまで近代以降の着物の様式変遷に関する研究を行っており、特に大正時代中期以降に着物の種類が増加し、生地や加飾技法が多様化していくことを確認している。

上記を踏まえ、本研究は、大正時代から昭和時代前期の着物雛形本に着目し、当時の着物文化において着物雛形本がどのような内容と役割を担っていたのかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、**1).着物雛形本の分類、2).掲載される着物の種類、3).着物雛形本と現存品との比較**の3点から考察を行う。

各観点から得られた知見については、以下の通りである。

1). 着物雛形本の分類

本研究の調査対象の前時期である明治時代の着物雛形本の種類については、すでに①肉筆の雛形本、②小袖雛形本を再版した雛形本、③友禅染職人による雛形本、④画家・図案家による雛形本、⑤呉服店

研究実績の概要（2）

に関連した雛形本、⑥その他の雛形本（着物以外の内容を含む雛形本）の6つの種類に分類がなされている¹⁾。今回の調査で確認できた資料においては、②、④、⑤、⑥に該当する雛形本を確認した。

②の例：大正 7(1918)年刊行『百撰飛那形 上・下』

※宝永元(1704)年刊行『丹前ひいなかた』を基にして再録されている。

④の例：大正 12(1923)年刊行『あかつき』

※編輯者「京洛圖案會社代表者 田畑清江」との記載が見られる。

⑤の例：大正 14(1925)年刊行『新緑』

※編輯者「松坂屋 意匠研究部」

⑥の例：昭和 7(1932)年 3 月刊行『桂友 同机 第七集』

※夏の染帯の図案のみが収録される。

2).掲載される着物の種類

大正時代から昭和時代前期にかけての「着物雛形本」に掲載されている着物の種類を概観すると、江戸時代後期からの意匠形式を引き継いだ、裾部分にのみ模様を配する「裾模様」形式が多く見受けられる。このことは、前時代である明治期と同様の傾向を示す。また、収録内容についても、着物以外に帯や羽織、袱紗などを含むものや、特定のアイテムを単独で収録した雛形本（前掲⑤）が存在しており、明治期の構成が踏襲されていることが確認できた。

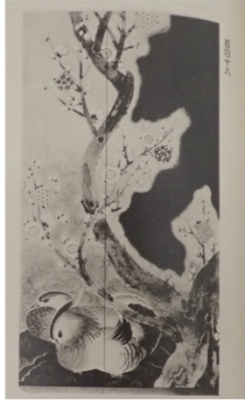
その一方で、着物の種類には変化が見られた。明治期までは主に紋付・裾模様形式のいわゆる「礼服」に相当する図案が中心であったのに対し、大正時代以降の着物雛形本には、明治時代後期に出現し、大正時代から昭和時代前期に隆盛を極めた「訪問服(着)」の図案が顕著に現れ始める。こうした傾向は、すでに筆者が明らかにした、大正時代から昭和時代前期の着物の種類の変遷状況²⁾とも整合しており、着物雛形本の収録内容からも当時の変化を裏付けることができた。

さらに、昭和 7(1932)年 7 月刊行『よそほひ』（株式会社 大丸図案部 大阪、京都、神戸発行）の序文に「近來訪問服の模様の傾向は穩健さと上品さの上に立脚して歩みを續けて居るのであります。従來の訪問服の域を今一步模様紋付の範圍に踏み入れたる實用的にして而も清清に燃ゆる藝術味豊かなるもの賞を懸けて蒐めたる創作圖案此を上梓して江湖の批判に俟つものであります」と記載されている通り、訪問服(着)に特化した着物雛形本が刊行されていることも確認できた。

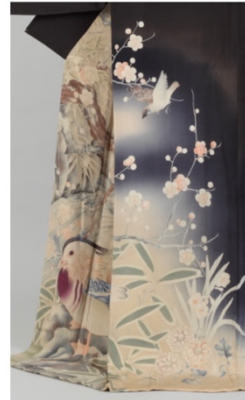
3).着物雛形本と現存品との比較

図 1 に示す通り、大正時代の着物雛形本に掲載された図案と類似する現存品を特定した。明治期同様、着物雛形本の図案は、当時の流行を反映しており、情報媒体として前時期と同様の役割を担っていたことが考えられる。

しかしながら、現段階では着物雛形本に見られる図案と完全に一致する現存品の確認には至っておらず、着物制作における着物雛形本が果たした具体的な役割については今後の課題となった。したがって、今後はさらに着物雛形本に収録される図案と現存品との照合作業を進め、大正時代から昭和時代前期における着物制作の過程において、着物雛形本がどのような位置付けにあったのかをより詳細に明らかにしていきたいと考える。



『晴嵐』百四十八番
大正10(1921)年9月発行



黒縮緬地草木鴛鴦雀模様着物
大正時代・20世紀 個人蔵

図 1.着物雛形本とそれに類似した現存品 (大正時代)

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

研究成果の一部を下記の通り発表した。

古川咲「近代女性の装いーその種類と使い分け」共立女子大学博物館企画展『和モダン-銘仙着物の華やぎ-』関連講演会、共立女子大学博物館、2025年10月25日。

さらに研究の内容に検討・考察を加え、『総合文化研究紀要』(第33号)に掲載予定である。

註

- 1) 櫻木英里子「明治期きもの雛形本に関する一考察ー発生と実態の背景ー」『服飾文化学会誌』15(1),pp.1-11,2014.
- 2) 拙稿「明治時代から昭和時代初期における「訪問服」の変遷、及びその特徴」『服飾学研究』4(1),pp.13-29,2022.